

学校教員における探求的・創造的活動の推進・ 阻害要因に関する検討

徳島大学 高等教育研究センター 准教授 福井 昌則

1. 本研究の目的

本研究の目的は、小学校・中学校・高等学校の教員における探求的・創造的活動をより充実化するために、探求的・創造的活動の推進・阻害要因に関する基礎的検討を得ることである。

2. 研究方法

2.1 調査対象者および調査の手続き

2022年9月、株式会社インテージに依頼し、Web調査を実施した。対象者の人数は628名で、男性418名、女性210名の常勤講師から回答が得られた。内訳は、小学校教員209名、中学校教員209名、高等学校教員210名であり、平均年齢48.18歳(SD 9.90)、平均勤続年数23.21年(SD 10.86)であった。

ここで探究学習に関する質問項目において、回答に整合性が見られなかった17名のデータは削除した。その結果、有効回答数611名、有効回答率97.3%となった。

調査にあたり、被験者の名前、メールアドレスなど、個人情報についての質問は設けていない。回答時間は約20分であった。

2.2 調査項目

(1) フェイス項目

- ・ 性別、年齢、勤務校種、勤続年数

(2) 探究学習に関する項目

- ・ 探究学習の実施状況
「現在指導している」、「現在は指導していないが、指導した経験がある」、
「指導したことはない」から1つ選択
- ・ 探究学習指導年数
「なし」、「1年未満」、「1~2年ぐらい」、「3~5年ぐらい」、「6~9年ぐ
らい」、「10年以上」から1つ選択
- ・ 探究学習に対するイメージ 「5:とてもよい」から「1:全く良くない」の5件法
- ・ 探究学習の重要性 「7:とても重要」から「1:全く重要でない」の7件法
- ・ 探究学習指導の自信 「5:とてもある」から「1:全くない」の5件法

(3) 教員の心理状況やICTスキルを調べる項目

- ・ TIPI-Jの開放性(小塩ら, 2012)

- ・ 一般性セルフ・エフィカシー尺度 (GSES) (坂野・東條, 1986)
- ・ 教員の ICT 活用指導力チェックリスト(文部科学省, 2016)

2.3 分析方法

最初にそれぞれの記述統計量を求めた。そして、学校間の差異により、探究学習の実施年数や意識について違いがあるかについて、 χ^2 検定および Kruskal-Wallis 検定で分析した。

次に、探究学習に対する意識、実施に関する実態と創造性(開放性)との関連性を調べるために、TIPI-J の開放性 2 項目の平均値を基準に上位群と下位群に分け、各群で探究学習の指導年数にどのような違いがあるかについて、を χ^2 検定で分析した。また、探究学習に対する意識がグループによってどのように異なるかについて分析するために、Wilcoxon の順位和検定を行った。なお、自己効力感、ICT スキルについても同様の分析を行った。

3. 結果

3.1 調査対象者の状況および各項目の記述統計量

探究学習の実施状況について、「現在指導している」183名(30.0%)、「現在は指導していないが指導した経験がある」187名(30.6%)、「指導したことはない」241名(39.4%)であった。探究学習指導年数については、「なし」241名(39.4%)、「1年未満」27名(4.4%)、「1~2年ぐらい」100名(16.4%)、「3~5年ぐらい」109名(17.8%)、「6~9年ぐらい」40名(6.5%)、「10年以上」94名(15.4%)であった。

探究学習に対するイメージ、重要性認識、指導の自信、および自己効力感、創造性(開放性)、ICT スキルの各項目の得点について表 1 に示す。

表 1 各項目の得点の状況

項目名	平均	SD
探究学習に対するイメージ	3.32	0.91
探究学習の重要性認識	3.91	1.24
探究学習指導の自信	2.87	0.92
自己効力感	10.40	2.56
創造性(開放性)	4.04	1.02
教材研究・指導の準備・評価・校務などに ICT を活用する能力	11.62	2.28
授業に ICT を活用して指導する能力	11.16	2.31
児童生徒の ICT 活用を指導する能力	11.45	2.34
情報活用の基盤となる知識や態度について指導する能力	11.46	2.22

3.2 探究学習に対する意識・探究学習の実施に関する学校間の差異

χ^2 検定により、探究学習の指導年数が学校間によって異なるかどうかを分析したところ、小学校、中学校、高等学校の教員の間で、探究学習の指導経験年数の分布に違いはないことが示された。つまり、どの校種でも探究型学習の取り組み年数の分布はほぼ同じであることが示唆された。次に、探究学習に対する意識と学校種別との関係を調べるために、Kruskal-Wallis 検定で評価したところ、探究学習に対するイメージ、探究学習の重要性認識については、小・中学校の教員の方が高校の教員よりも有意に高い値を示している傾向が見られた。一方、探究学習指導に対する自信については、学校種別による違いは見られなかった。

3.3 探究学習に対する意識と創造性(開放性)、自己効力感、ICT スキルとの関連性

創造性の高い群は、低い群と比較して、探究学習を実施している人数は有意に多かった。そして探究学習に対するイメージおよび探究学習指導の自信は有意に高かったが、探究学習の重要性認識については差異が認められなかった。

次に、自己効力感の高い群は、低い群と比較して、探究学習を実施している人数は有意に多かった。そして探究学習に対するイメージおよび探究学習指導の自信は有意に高かったが、探究学習の重要性認識については差異が認められなかった。

最後に ICT スキルについて、「教材研究・指導の準備・評価・校務などに ICT を活用する能力」「授業に ICT を活用して指導する能力」「児童生徒の ICT 活用を指導する能力」「情報活用の基盤となる知識や態度について指導する能力」のいずれにおいても、それらの値が高い群は、低い群と比較して、探究学習を実施している人数は有意に多かった。また、「教材研究・指導の準備・評価・校務などに ICT を活用する能力」「授業に ICT を活用して指導する能力」「児童生徒の ICT 活用を指導する能力」「情報活用の基盤となる知識や態度について指導する能力」のいずれにおいても、それらの値が高い群は、探究学習に対するイメージ、探究学習の重要性認識および探究学習指導の自信のいずれにおいても有意に高かった。

4. 考察

創造性が高い群や自己効力感が高い群が探究学習をより多く実施していることから、探究学習が教師の創造性や自己効力感を高める可能性が示唆される。また、これらの群では探究学習に対するイメージや指導に対する自信が高いことが観察されたが、探究学習の重要性に関しては全群に共通して差異がないことから、探究学習の重要性については既に広く認識されていると想定される。次に、高い ICT スキルを持つ群が探究学習をより多く実施していることから、探究学習の効果的な実施に ICT が重要な役割を果たす可能性がある。

ここで、探究学習の教員研修充実化に向けての提案として、まず ICT スキルの強化があげられる。教員の ICT スキルを高めるトレーニングを導入し、教材研究や授業準備、評価、校務に ICT を効果的に活用する方法を教えることで、探究学習に対する意識の改善および探究学習に必要な ICT スキルを身につけることが期待される。次に、創造性と自己効力感の育成を行うような教材開発や教育手法のワークショップを通じ、探究学習に対する指導の自信を高めることにつながる可能性がある。

一方、すでにそれらのスキルが高い教員には、探究学習の実践的なトレーニングが有効である可能性がある。そして、探究学習の教員研修の中で、探究学習の重要性を

認識させるような活動はさほど有効でない可能性がある。これらの知見を取り入れた教員研修プログラムを開発し、それらの有効性を実践的に検討していく必要がある。

5. まとめと今後の展望

本研究の目的は、本研究の目的は、小学校・中学校・高等学校の教員における探求的・創造的活動をより充実化するために、探究的・創造的活動の推進・阻害要因に関する基礎的検討を得ることであった。本研究を通じ、創造性や自己効力感、ICTスキルの向上が、探究学習の充実化に寄与する可能性を示した。今後、本研究の結果を取り入れた教員研修プログラムを開発し、それらの有効性を実践的に検討していく必要がある。